

二国間交流事業 共同研究報告書

令和5年4月28日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

多摩美術大学・美術学部

[職・氏名]

教授・木下京子

[課題番号]

JPJSBP120209935

1. 事業名 相手国: 米国 (振興会対応機関: OP) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) アーサー・トレス・コレクションの研究と目録化

(英文) Study and Cataloging of the Arthur Tress Collection

3. 共同研究実施期間 2020年4月1日～2023年3月31日 (3 年 0 ヶ月)【延長前】 2020年4月1日～2022年3月31日 (2 年 0 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Pennsylvania ・ Professor ・ Julie Nelson Davis

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		3,800,000 円
内訳	1年度目執行経費	1,900,000 円
	2年度目執行経費	1,900,000 円
	3年度目執行経費	0 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	5名
相手国側参加者等	12名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0		()
2年度目	3		()
3年度目	4		()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

研究1年目はコロナ禍のため渡航が叶わず、実地調査ができなかったが、相手国研究者たちとは Zoom によるオンライン会議を定期的に行い、意見交換し交流を深めた。当時は新型コロナウイルスがいつ終息するのか見当もつかず、予定が立てづらい状況ではあったが、ペンシルヴェニア大学図書館としてはできるだけ早い時期にアーサー・トレス氏よりコレクションの寄贈を受けたことを発表し、その一部を公開したいという意向があったため、同図書館内キスラック・ギャラリーで保存状態がよく、ジュリー・デイヴィス教授の学生たちが研究しやすい絵本や絵手本、画譜類、そして近代の書籍を展示することを決めた。トレス氏は書籍を誰もが手に取り、読むことができるために大学図書館に寄贈を決めたのだが、一般公開に向けての足掛かりとして何らかのテーマを設けまとまった形で展示し、社会に向けアピールする段取りを整えた。2年目の2021年度には渡航が可能になり、8月に木下がペンシルヴェニア大学に行き、学生が研究し展示するための書籍の選出に立ち会い、基礎データを採取した。また、デイヴィス教授と博士課程の学生たちとどのようなテーマで展示するかディスカッションを行った。3月に山本氏と木下がペンシルヴェニア大学図書館を訪れ、学生たちが選んだ版本や近代書籍を確認し、そして展示は行わない絵本を中心に調査を進めた。そして2022年の9月に展示し、一般公開を記念してシンポジウムを開催することを決定した。研究期間を一年延長し、2022年度の夏に日本側研究者全員で現地に赴き、相手国研究者チームと大学院生たちと協働して調査を行い、基礎データを採取した。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本研究交流により得られた新たな知見として、特に絵暦や艶本、おもちゃ絵、発句集や狂歌本、明治時代の紙や布の見本帖など、日本国内で所蔵が確認されていない摺物、肉筆本や版本などの書籍が確認された。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

実際に書籍というモノを通して、書誌学的見地による研究の糸口を見つけることができたように思う。時間の制約上、基礎調査では割愛せざるを得なかったが、特に経験豊かな浅野氏により和本の調書の取り方や書籍内容の分類法など具体的な研究手法が伝授され、それは両国の研究者にとっても有意義な体験となり、今後に活かされる学びとなった。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

トレス・コレクションの一部ではあるが、絵本や絵手本、画譜を一般公開し、書籍へのアクセスを可能にしたこと。そしてペンシルヴェニア大学の学生たちに生きた学びを提供し、日本に対する興味を持たせたこと。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

ペンシルヴェニア大学大学院には、日本美術史を専攻する博士課程の院生だけではなく、日本文学や日本文化を学ぶ様々な学生が在籍している。学生たちは日本の研究者たちと日本語でコミュニケーションを取りながら調査の補助を行い、実践を通してさまざまな教えを受けたことは彼らにとって良い勉強になったと思われる。また、本研究の初期メンバーの博士課程大学院生だった足立奈緒子氏は、東京国立博物館学芸企画部企画課国際交流室に多言語対応(英語)のアソシエイトフェローとして就職し、現在も研究を継続している。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

トレス・コレクションの基礎調査を終えたことで、今後は書籍の一つ一つを研究する土台ができたと思われる。実際研究を深化させるべき稀覯本は数多く存在し、これらの研究は日本の書誌学・美術史・文化史など各分野において新知見をもたらすものと確信する。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

特になし。